



# 正調北海盆踊りと 旭川夏まつり

盆踊りの最中に殺傷事件が起こり、その正常化に盆踊り保存会が結成され、踊りの振り付け・唄・太鼓も見直された。昭和37年から旭川夏まつりの開催と同時に盆踊り大会も協賛行事として歩みをともにしてきた。その足跡を新聞記事と聞き取りをもとに集大成した。



中期には反動として復活していく。大正時代から昭和初期になると、都市化が進み大衆娯楽のブームとともに、盆踊りの盛況は、新作の踊りも登場する。不幸な戦時体制にはいると、国家は戦時体制下に国民総動員の名のもとに、民衆の国威発揚にあらゆる手段を図った。当時の放送メディアはNHKのみで、民謡や盆踊りまで、その有効な手段に活用した。北海道庁は十七年七月に、食糧増産の意欲増進を目的に、各市町村に盆踊り奨励の通達をだした。このような背景のもとに札幌中央放送局は、十七年八月に「盆踊り唄」の番組を放送し、道民の末端まで行政の指導による盆踊りが催された。ところが戦争末期となると、本土の空襲や極度の物資不足は、盆に踊る余暇もなくなった。戦後平和が訪れると、盆踊りは盛況を呈するが高度経済成長の都市化の進展は、地域共同体の崩壊とともに、盆踊りも危機的状況下にある。（『世界大百科事典』、インターネット『盆踊りの世界』）

盆踊りの形態は、広場の中央に櫓を組んで、その上で太鼓を叩き、櫓の中心に唄い手に合わせて踊り手が二重三重にと、輪を描いて踊る輪踊り型が一般的であるが、唄い手と踊り手が十数人で連をつくり街を踊り歩く行進型もあり、徳島の阿波踊りや越中八尾の風の盆踊りが代表的である。

北海道における盆踊りは、本州から団体移民で移住した地域に、郷里の盆踊りを継承したところが多い。その後都市や村の番外地に商店街が形成され、大売り出しなどの行事に合わせて行われるようになったものは明治末期であろう。また炭鉱などは、会社の慰安行事として行われるようになって炭坑節が北海盆踊り唄の原型となる。

上川盆地においては、東鷹栖村（当時鷹栖村）の松平農場に、明治二十八年富山県下新川郡宇奈月町愛